

# 学校法人享栄学園寄附行為

## 第1章 総則

(名称)

**第1条** この法人は、学校法人享栄学園と称する。

(事務所)

**第2条** この法人は、事務所を三重県鈴鹿市郡山町字西高山663番222 に置く。

## 第2章 目的及び事業

(目的)

**第3条** この法人は、教育基本法及び学校教育法に従い、学校教育を行い、誠実で信頼される人材を育成することを目的とする。

(設置する学校)

**第4条** この法人は、前条の目的を達成するため、次に掲げる学校を設置する。

(1) 鈴鹿大学

大学院 国際学研究科

国際人間科学部

国際学科

国際人間科学部

国際学科

こども教育学部

こども教育学科

国際地域学部

国際地域学科

(2) 鈴鹿大学短期大学部

生活コミュニケーション学科

## 第3章 役員及び理事会

(役員)

**第5条** この法人に、次の役員を置く。

(1) 理事 5人以上9人以内

(2) 監事 2人

2 理事のうち1人を理事長とし、理事総数（現任の理事総数。以下、同じ。）の過半

数の議決により選任する。理事長の職を解任するときも、同様とする。

3 理事長以外の理事のうちから若干名を常務理事とすることができ、理事会において選任する。

4 常務理事は、理事長を補佐し、日常の業務を処理する。

(理事の選任)

**第6条** 理事は、次の各号に掲げる者とする。

(1) 学長のうちから理事会において選任した者 1人又は2人

(2) 評議員のうちから理事会において選任した者 1人又は2人

(3) この法人に関係ある者又は学識経験者のうちから理事会において選任した者  
3人以上5人以内

2 前項第1号及び第2号の理事は、学長又は評議員の職を退いたときは、理事の職を失うものとする。

(監事の選任及び職務)

**第7条** 監事は、この法人の理事、職員(学長、教員その他の職員を含む。以下、同じ。)

又は評議員以外の者であって理事会において選出した候補者のうちから、評議員会の同意を得て、理事長が選任する。

2 監事は、次の各号に掲げる職務を行う。

(1) この法人の業務を監査すること。

(2) この法人の財産の状況を監査すること。

(3) この法人の業務又は財産の状況について、毎会計年度、監査報告書を作成し、当該会計年度終了後2月以内に理事会及び評議員会に提出すること。

(4) 第1号又は第2号の規定による監査の結果、この法人の業務又は財産に関し不正の行為又は法令若しくは寄附行為に違反する重大な事実があることを発見したときは、これを文部科学大臣に報告し、又は理事会及び評議員会に報告すること。

(5) 前号の報告をするために必要のあるときは、理事長に対して評議員会の招集を請求すること。

(6) この法人の業務又は財産の状況について、理事会に出席して意見を述べること。

(役員任期)

**第8条** 役員任期は、3年(就任の日を起算日とする。)とする。ただし、補欠の役員任期は、前任者の残任期間とする。

2 役員は、再任されることができる。

3 役員は、任期満了の後でも、後任の役員が選任されるまでは、なお、その職務を行う。

(役員補充)

**第9条** 理事又は監事のうち、その定数の5分の1を超える者が欠けたときは、1月以内に補充しなければならない。

(役員解任及び退任)

**第10条** 役員が次の各号の一に該当するに至ったときは、理事の総数の4分の3以上出席した理事会において、理事総数の4分の3以上の議決及び評議員会の議決により、これを解任することができる。

- (1) 法令又は寄附行為に著しく違反したとき。
- (2) 心身の故障のため職務の執行に堪えないとき。
- (3) 職務上の業務に著しく違反したとき。
- (4) 役員たるにふさわしくない重大な非行があったとき。

2 役員は次の事由により退任する。

- (1) 任期の満了
- (2) 辞任
- (3) 学校教育法(昭和22年3月31日法律第26号)第9条各号に掲げる事由に該当するに至ったとき。

(理事会)

**第11条** この法人に理事をもって組織する理事会を置く。

2 理事会は、学校法人の業務を決し、理事の職務の執行を監督する。

3 理事会は、理事長が招集する。

4 理事長は、理事総数の3分の2以上の理事から会議に付議すべき事項を示して理事会の招集を請求された場合には、その請求のあった日から7日以内にこれを招集しなければならない。

5 理事会を招集するには、各理事に対して、会議開催の場所及び日時並びに会議に付議すべき事項を書面により通知しなければならない。

6 前項の通知は、会議の7日前までに発しなければならない。ただし、緊急を要する場合は、前項及び本項本文の規定にかかわらず、相当と認める方法で通知することができる。

7 理事会に議長を置き、理事長をもって充てる。

8 理事長が第4項の規定による招集をしない場合には、招集を請求した理事全員が連名で理事会を招集することができる。この場合における理事会の議長は、出席理事の互選によって定める。

9 理事会は、この寄附行為に別段の定めがある場合を除くほか、理事総数の3分の2以上の理事が出席しなければ、会議を開き、議決することができない。ただし、第12項の規定による除斥のため3分の2に達しないときは、この限りでない。

10 前項の場合において、理事会に付議される事項につき書面をもって、あらかじめ意思を表示した者は、出席者とみなす。

11 理事会の議事は、法令及びこの寄附行為に別段の定めがある場合を除くほか、出席した理事の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

12 理事会の決議について、直接の利害関係を有する理事は、その議事の議決に加わることができない。

(業務の決定の委任)

第12条 法令及びこの寄附行為の規定により、評議員会に付議しなければならない事項その他この法人の業務に関する重要事項以外の決定であつて、あらかじめ理事会において定めたものについては、理事会において指名した理事に委任することができる。

(理事長の職務)

第13条 理事長は、法令及びこの寄附行為に定める職務を行い、この法人内部の業務を総理し、この法人の業務についてこの法人を代表する。

(理事の代表権の制限)

第14条 理事長以外の理事は、この法人の業務について、この法人を代表しない。

(理事長職務の代理等)

第15条 理事長に事故があるとき又は理事長が欠けたときは、あらかじめ理事会において指名された理事が、順次にその職務を代理し又はその職務を行う。

(議事録)

第16条 議長は、理事会の開催の場所及び日時並びに決議事項及びその他の事項について、議事録を作成しなければならない。

2 議事録には、議長及び議長が指名した出席した理事2人が記名押印し、常にこれを事務所に備えおかなければならない。

3 出席理事から議事録の記載について異議のあった場合は、その申出に基づいて、次の会議に諮って、議長がこれを確認しなければならない。

#### 第4章 評議員会及び評議員

(評議員会)

第17条 この法人に評議員会を置く。

2 評議員会は、11人以上19人以内の評議員をもって組織する。

3 評議員会は、理事長が招集する。

4 理事長は、評議員総数（現任の評議員総数。以下、同じ。）の3分の1以上の評議員から会議に付議すべき事項を示して評議員会の招集を請求された場合には、その請求のあった日から20日以内に、これを招集しなければならない。

5 評議員会を招集するには、各評議員に対して、会議開催の場所及び日時並びに会議に付議すべき事項を、書面により通知しなければならない。

6 前項の通知は、会議の7日前までに発しなければならない。ただし、前項及び本項本文の規定にかかわらず、相当と認める方法で通知することができる。

7 評議員会に議長を置き、議長は、評議員の互選によって選任する。

- 8 評議員会は、評議員総数の過半数の出席がなければ、その会議を開き、議決することができない。
- 9 前項の場合において、評議員会に付議される事項につき書面をもって、あらかじめ意思を表示した者は、出席者とみなす。
- 10 評議員会の議事は、出席した評議員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- 11 議長は、評議員として議決に加わることができない。
- 12 議長は、理事長、常務理事を議事参加者として評議員会に出席させることができる。

(議事録)

**第18条** 第16条の規定は、評議員会の議事録について準用する。この場合において、同条第2項中「議長が指名した出席した理事2人」とあるのは、「議長が指名した出席した評議員2人」と読み替えるものとする。

(諮問事項)

**第19条** 次の各号に掲げる事項については、理事長において、あらかじめ評議員会の意見を聴かなければならない。

- (1) 予算・借入金（当該会計年度内の収入をもって償還する一時の借入金を除く。）  
及び基本財産の処分並びに運用財産中の不動産及び積立金の処分
- (2) 事業計画
- (3) 予算外の重要な義務の負担又は権利の放棄
- (4) 寄附行為の変更
- (5) 合併
- (6) 目的たる事業の成功の不能による解散
- (7) 寄附金品の募集に関する事項
- (8) その他この法人の業務に関する重要事項で理事会において必要と認めるもの

(評議員会の意見具申等)

**第20条** 評議員会は、この法人の業務若しくは財産の状況又は役員の仕事執行の状況について、役員に対して意見を述べ、若しくはその諮問に答え、又は役員から報告を徴することができる。

(評議員の選任)

**第21条** 評議員は、次の各号に掲げる者とする。

- (1) この法人の職員で、理事会において推薦された者のうちから評議員会において選任した者 4人以上7人以内
- (2) この法人の設置する学校を卒業した者で、年齢25歳以上の者のうちから理事会において選任した者 2人又は3人
- (3) この法人に関係ある者又は学識経験者のうちから理事会において選任した者

5人以上9人以内

- 2 前項第1号に規定する評議員は、この法人の職員の地位を退いたときは、評議員の職を失うものとする。

(任期)

**第22条** 評議員の任期は、3年(就任の日を起算日とする。)とする。ただし、補欠の評議員の任期は、前任者の残任期間とする。

- 2 評議員は、再任されることができる。
- 3 評議員は、任期満了の後でも後任者が選任されるまでは、なおその職務を行う。
- 4 第10条の規定は、評議員の解任及び退任について準用する。

## 第5章 学園長

(学園長)

**第23条** この法人が設置する学校の教学を統轄するため、学園長を1人置くことができる。

- 2 前項の学園長は、理事会において選任する。
- 3 学園長の任期は、2年とする。ただし、再任されることができる。

## 第6章 資産及び会計

(資産)

**第24条** この法人の資産は、財産目録記載のとおりとする。

(資産の区分)

**第25条** この法人の資産は、これを分けて基本財産、運用財産とする。

- 2 基本財産は、この法人の設置する学校に必要な施設及び設備又はこれらに要する資金とし、財産目録中基本財産の部に記載する財産及び将来基本財産に編入された財産とする。
- 3 運用財産は、この法人の設置する学校の経営に必要な財産とし、財産目録中運用財産の部に記載する財産及び将来運用財産に編入された財産とする。
- 4 寄附金品については、寄附者の指定がある場合には、その指定に従って基本財産、運用財産に編入する。

(基本財産の処分の制限)

**第26条** 基本財産は、これを処分してはならない。ただし、この法人の事業の遂行上やむを得ない理由があるときは、理事会において理事総数の3分の2以上の議決を得て、その一部に限り処分することができる。

(積立金の保管)

**第27条** 基本財産及び運用財産中の積立金は、確実な有価証券を購入し、又は確実な信託銀行に信託し、又は確実な銀行に定期預金とし、若しくは定額郵便貯金として理事長が保管する。

(経費の支弁)

**第28条** この法人の設置する学校の経営に要する費用は、基本財産並びに運用財産中の不動産及び積立金から生ずる果実、授業料収入、入学金収入、検定料収入その他の運用財産をもって支弁する。

(予算及び事業計画)

**第29条** この法人の予算及び事業計画は、毎会計年度開始前に、理事長が編成し、理事会において出席した理事の3分の2以上の議決を得なければならない。これに重要な変更を加えようとするときも、同様とする。

(予算外の新たな義務の負担又は権利の放棄)

**第30条** 予算をもって定めるものを除くほか、新たに義務の負担をし、又は権利の放棄をしようとするときは、理事会において出席した理事の3分の2以上の議決がなければならない。借入金(当該会計年度内の収入をもって償還する一時の借入金を除く。)についても、同様とする。

(決算・実績の報告及び剰余金等の処分)

**第31条** この法人の決算は、毎会計年度終了後2月以内に作成し、監事の意見を求めるものとする。

2 理事長は、毎会計年度終了後2月以内に、決算及び事業の実績を評議員会に報告し、その意見を求めなければならない。

3 学校会計の決算上、剰余金を生じたときは、その一部又は全部を基本財産若しくは運用財産中の積立金に編入し又は次会計年度に繰り越しするものとする。

(財産目録等の備付け及び閲覧)

**第32条** この法人は、毎会計年度終了後2月以内に財産目録、貸借対照表、収支計算書及び事業報告書を作成しなければならない。

2 この法人は、前項の書類及び第7条第2項第3号の監査報告書を事務所に備えおき、この法人の設置する私立学校に在学する者その他の利害関係人から請求があった場合には、正当な理由がある場合を除いて、これを閲覧に供しなければならない。

(資産総額の変更登記)

**第33条** この法人の資産総額の変更は、毎会計年度末の現在により、会計年度終了後2月以内に登記しなければならない。

(会計年度)

**第34条** この法人の会計年度は、4月1日に始まり、翌年3月31日に終わるものとする。

## 第7章 解散及び合併

(解散)

**第35条** この法人は、次の各号に掲げる事由によって解散する。

- (1) 理事会において理事総数の3分の2以上の議決及び評議員会の議決
- (2) この法人の目的たる事業の成功の不能となった場合で、理事会において出席した理事の3分の2以上の議決
- (3) 合併
- (4) 破産
- (5) 文部科学大臣の解散命令

2 前項第1号に掲げる事由による解散にあつては文部科学大臣の認可を、同項第2号に掲げる事由による解散にあつては文部科学大臣の認定を受けなければならない。

(残余財産の帰属者)

**第36条** この法人が解散した場合（合併又は破産によって解散した場合を除く。）における残余財産は、解散のときにおける理事会において出席した理事の3分の2以上の議決により選定した学校法人に帰属する。

(合併)

**第37条** この法人が合併しようとするときは、理事会において理事総数の3分の2以上の議決を得て文部科学大臣の認可を受けなければならない。

## 第8章 寄附行為の変更

(寄附行為の変更)

**第38条** この寄附行為を変更しようとするときは、理事会において出席した理事の3分の2以上の議決を得て、文部科学大臣の認可を受けなければならない。

2 私立学校法施行規則に定める届出事項については、前項の規定にかかわらず、理事会において出席した理事の3分の2以上の議決を得て、文部科学大臣に届け出なければならない。

## 第9章 補則

(書類及び帳簿の備付)

**第39条** この法人は、第32条第2項の書類のほか、次の各号に掲げる書類及び帳簿を、常に事務所に備えおかななければならない。

- (1) 寄附行為
- (2) 役員及び評議員の名簿及び履歴書



(3) 収入及び支出に関する帳簿及び証憑書類

(4) その他必要な書類及び帳簿

(公告の方法)

**第40条** この法人の公告は、鈴鹿大学の掲示場に掲示して行う。

(施行細則)

**第41条** この寄附行為の施行についての細則その他この法人及びこの法人の設置する学校の管理及び運営に関し必要な事項は、理事会が定める。

**附 則**

この寄附行為は、昭和53年10月4日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、昭和54年9月10日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、昭和59年2月1日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、昭和60年3月30日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、昭和60年10月2日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成元年3月31日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成2年3月31日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成3年4月1日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成5年12月21日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成6年5月26日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成8年5月28日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成9年3月3日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成9年12月19日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成10年3月18日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成10年7月30日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成12年10月26日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成13年8月1日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成14年10月2日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成16年1月7日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成16年4月1日より施行する。

ただし、鈴鹿国際大学国際学部国際関係学科は変更後の寄附行為にかかわらず、平成16年3月31日に当該学科に在学する者（平成16年度及び平成17年度に当該学科に編入学する者を含む。）が当該学科に在学しなくなるまでの間存続するものとする。

**附 則**

この寄附行為は、平成17年3月31日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成17年11月25日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成18年2月23日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成20年4月1日より施行する。

（鈴鹿国際大学国際学部の存続に関する経過措置）

鈴鹿国際大学国際学部は、改正後の寄附行為第4条の規定にかかわらず平成20年3月31日に当該学部 に在学する者が当該学部 に在学しなくなるまでの間、存続するものとする。

**附 則**

この寄附行為は、文部科学大臣の認可の日（平成20年10月17日）から施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成21年4月1日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成22年4月1日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成22年11月2日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成22年11月12日より施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成23年4月1日より施行する。

(鈴鹿短期大学生活学科の存続に関する経過措置)

鈴鹿短期大学生活学科は、改正後の寄附行為第4条の規定にかかわらず平成24年3月31日に当該学科に在学する者が当該学科に在学しなくなるまでの間、存続するものとする。

**附 則**

この寄附行為は、文部科学大臣の認可の日（平成23年7月15日）から施行する。

**附 則**

この寄附行為は、文部科学大臣の認可（平成26年3月28日）を受けた後、平成26年4月1日から施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成27年4月1日から施行する。

**附 則**

この寄附行為は、文部科学大臣の認可の日（平成28年8月31日）から施行する。

**附 則**

この寄附行為は、文部科学大臣の認可の日（平成29年5月30日）から施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成29年10月24日から施行する。

**附 則**

この寄附行為は、平成31年4月1日から施行する。